アイデンティティ

梨香

ついに私のアイデンティティが崩壊した……！

これから、自分が何者として生きていくべきなのか、それが分からなくなってしまったのだ。この五年間、私は塾で講師をしていた。英語、数学を主に教え、「先生」と生徒から呼ばれる職であったことから、それが社会の中で自らの地位やアイデンティティを形成するものとなっていたのだろう。仕事を辞めた今、自分には何もないことに気づいた。

現在の私は、シングルマザー。いわゆるシンママっていうやつだ。諸事情から未婚で出産しシンママになったのだが、それが今残っている『私』という人間への定義の一つ。

もう一つ、私には定義がある。日本人女性――。外国、とりわけ欧米諸国から見たアジア人女性の姿、日本人女性の姿、というものが存在するわけで。日本の外に出れば、私はたちまち「日本人女性」なのだ。アジア人女性をテーマにした映画や本など作品は様々あるが、それらは、欧米人がステレオタイプ化した「アジア人女性」のイメージへの批判である場合も多い。私は決して、しめやかで控えめで恥じらいを重んじるような古典的な「日本人女性」ではないと思っている。息子が生まれた瞬間から今までずっと、シングルマザーをやっているくらいなのだから。「内助の功」、そんなタイプでもない。私は、子供の頃から、表舞台に立つことが好きな活動的なタイプだった。そんなステレオタイプ化された古典的な「日本人女性」への理想が幻と化されたのかどうかは分からない。互いの意見が食い違うばかりか、互いの事情や心情への理解が至らないことから生じる攻撃の言葉の数々により、国際結婚の予定が崩壊中である……。シングルマザーの国際結婚――。誰が考えてもう

まくいく筈のないシナリオだったのかも知れない……。

今ではシングルマザーも国際結婚も、ましてや国際離婚だって珍しくない。シンママの友達もいるし、今流行りのＳＮＳを通じてシンママ同士のサークルや、「旦那様が外国人」なんていうサークルだって存在する。コミュニティの存在は現代に限ったことではない。昔から人はどこかのコミュニティに属していて、それが、自分が何者であるか、という「アイデンティティ」を形成しているといえる。そうであるからして、どのコミュニティにも属さなくなった時、自分のアイデンティティが崩壊してしまう。そう考えている。

私は、自分が未婚出産のシンママだってことを恥じたことは一度もない。むしろ、誇りに思っているくらいだ。だが、国際結婚の難しさを痛感した今回ばかりは、自分のアイデンティティを保てないでいる……。私は自分が何をしたいのか、子供を育てていく為にどう生きていくべきなのか、さっぱり分からないままなのだ。

私が自らのアイデンティティについて考えるようになったのは、大学二年生の頃。この大学では、一年生の時から小ゼミの授業を取ることができ、興味があるテーマのゼミを自由選択できた。二年生からゼミに入ることにしたのだが、文学といえば英文学、シェイクスピア……？　と、当時、ザックリとしたイメージしか持っていなかった私は、イギリスの作家を扱っているゼミに希望を出していた。ところが、大学側の手違いで、私はそのゼミから名前が漏れてしまい、すでに定員一杯となっていた。まだ人数に余裕のある米文学のゼミを提案され、そこに入らなければ必修単位も取れなかったことから仕方なく入ったのだったが、そのゼミに入ったことが、その後の私の人生において「アイデンティティ」という言葉を特別な響きにした。

仕方なく入ったゼミだったはずなのに、興味を深く惹かれるものがあって結局四年生までそのゼミに所属していた。米文学の中でも、とりわけ「黒人文学」を通じて黒人の視点から見たアメリカ社会、歴史、アフリカン・アメリカンの「アイデンティティ」を読み取り研究するゼミであった。それを学んでいく内に、「アジア人女性」「日本人女性」としての「アイデンティティ」と「プライド」を保とうと考えるようにもなったのである。

一般的には、白人社会の中での黒人差別、有色人種への差別として歴史は教えられがちだが、実は、黒人内部での差別というのも存在した。ゼミの研究で、

Wallace Thurmanという作家の*The Blacker the Berry*という作品を読んだことがある。彼は、ハーレム・ルネッサンス時代に生きた黒人男性作家で、肌の色による黒人内部での差別をテーマにした作品を残している。黒人内部での差別とはどういうことか。白人が経営するプランテーションで働く黒人達の中で、白人主人の妾となる黒人女性もいたのだが、その間に誕生した混血の子供の肌の色はといえば、もちろん、黒人の母親よりも薄くなる。このようにして、白人との混血が進むにつれ、黒人の血は更に薄くなり、見た目は白人のような「黒人」も多数いたのだ。このことが黒人コミュニティ内での差別を生み、肌の色が白に近ければ近いほど良いとされた。*The Blacker the Berry*の中に「ブルーベインサークル」と呼ばれるコミュニティが登場する。これは、肌の色が薄い黒人のアイデンティティの象徴として描かれている。ブルーベイン（blue vein）＝「青い血管」。青い血管の色が透けて見えるほどに肌の色が薄い「黒人」のコミュニティで、黒人社会の上層部のような存在なのだ。この物語の主人公の少女エマは、肌の色が黒光りするほど黒かった為に、肌の色に悩み、家族からの疎外感を感じ居場所もなく、黒人社会内部で苦しんでいた黒人たちの象徴そのものなのだ。

白人のような黒人。この定義もまた、人の生き方を左右した。同じ黒人なのに、肌の色が自分よりも濃い者を差別の対象とし、自分よりも下層の者とみなして優越感を味わった。南部では「一滴規定」なるものがあったのだが、例えばフロリダ州法では、黒人の血が四世代前まで混ざっていれば黒人と定め、どこまでを黒人をするかが決められていた。その為、見た目が白人のような黒人は、差別から逃れる為に完全に白人のフリをして生きていたという。これをpassingと呼び、passingして生きていた黒人たちもまた、より肌の色が濃い黒人に対し優越感を感じつつも、白にも黒にも属せない苦しみや迷いもあったかもしれない。祖国アフリカへの思いを馳せながら黒人としてのプライドを持って生きていた黒人達からの批判もあったが、白人として生きる方が社会的立場も高く有利であったことから、白人という「アイデンティティ」を持つことを選んだのだ。

「アイデンティティ」。この言葉は、私は日本語の中には当てはまる単語はない、と考えている。辞書を引くと、「自我同一性」や「自己同一性」という言葉に訳されているのだが、例えば初めてこの言葉を聞くとして、その意味をそう教えられた

のなら、「アイデンティティ」の意味を明確かつ即座に理解できる人は、かなり少ないだろう。私が所属していたそのゼミでも、「アイデンティティ」という言葉が、毎回の授業の中で何度も何度も繰り返し発せられた。私自身も、その言葉を発しながらも、実は曖昧なイメージしか持っていなかった。そんな中で、先生がピンとくる言葉をくれたのだ。

「自分が自分であること」

これが「アイデンティティ」の意味だ。意味であり、和訳ではない。自分が自分である、ということは、つまり、社会的な立場、有利さを選ぶのもその人の「アイデンティティ」であり、社会の目は気にせず自分の道を行くのもまた、その人の「アイデンティティ」なのだ。

世間からの目を気にし過ぎる私は、自分が何者であるか、という問いかけに対して、何か社会的ステータスを感じられるものと結びつけがちだった。考えてみれば、「〇〇高校の生徒」、「〇〇大学の学生」「〇〇塾の先生」ということがアイデンティティそのものになっていたのではなかろうか。

それが、今となっては、何もない。今の私には、何も所属しているものがないのだ。

社会の中で自分がどの人種や民族に属していて、どんな学校に通っていて、どんな職に就いているか、ということ等と、個々の「アイデンティティ」との関係は深い。それは、社会の目があるからだ。特に女性であれば、どんな人と結婚して、どんな地域のどんな家に住んでいるか、それさえも「アイデンティティ」の一部となり得る。私自身も、カナダのリゾート地に住む白人との国際結婚、ということでもちろん周囲からも羨ましがられたし、国際結婚＝語学が堪能である、と評価もされただろう。それによって、自分が何者であるか、という「アイデンティティ」というよりは、社会的立場を保っていたのかもしれない。だから、仕事も辞め、国際結婚もうまくいかなくなった時、自分の居場所がすっかりなくなってしまったように感じたのだ。そう気づき始めた。

今、私に在るもの。それは、日本人であること、女性であること、息子の母親であること。これらは、確かに私を形成するものだ。シングルザーとして、経済的にも息子を支えられるように頑張ってきたのだ。考えてみれば、意外と「居場所」があるかもしれない。主人公エマだって、最終的には自分のプライドを持って、自分の道を見つけるのだから、再生の余地はありそうだ。

どんなコミュニティに所属するか。先ほどの passing の例のように、それがいいか悪いかは別として、自分で選択可能なのだ。ただし、勘違いしてはいけないのは、所属する学校や会社などのコミュニティは、人の人生を表すものではない。そこで、どんな考えを持って、どんな活動をしてきて、自分のプライドを持って生きているか、どんな選択をしてきたか。自分で選んできた道が、人の「アイデンティティ」なのだ。